

川崎医科大学における大学連携活動について：その9 －2016年度半ばから2017年度半ばにかけての活動－

大槻剛巳^{1,2,3)}, 李 順姫²⁾, 福永仁夫^{4,5)}

- 1) 川崎医科大学産学官連携活動担当副学長補佐
- 2) 川崎医科大学衛生学
- 3) 大学コンソーシアム岡山 (川崎医科大学運営委員, 各種常設委員会委員,
将来構想委員会委員, 社会人教育委員会委員長)
- 4) 川崎医科大学学長
- 5) 大学コンソーシアム岡山 (川崎医科大学代表者)

(平成29年8月30日受理)

External activities such as university cooperation and others in Kawasaki Medical School: Part 9
－ Activities from the middle of the 2017 fiscal year to the middle of 2017 －

Takemi OTSUKI^{1,2,3)}, Suni LEE²⁾, Masao FUKUNAGA^{4,5)}

- 1) *Vice President Assistant Specialized in Industry-Academia-Government Cooperation,
Department of Hygiene, Kawasaki Medical School*
- 2) *Department of Hygiene, Kawasaki Medical School*
- 3) *Acting Committee Member of Kawasaki Medical School, Member in All Permanent Committees,
Selected Member of Committee for the Concept for the Future, Chairperson
of the Continuing Education Committee, in the Consortium of Universities in Okayama*
- 4) *Dean, Kawasaki Medical School*
- 5) *Deputation from Kawasaki Medical School in the Consortium of Universities in Okayama
(Accepted on August 30, 2017)*

抄 録

川崎医科大学では、大学連携・産学官連携について様々な取組に参画している。これらのうち筆頭著者が担当している事業の中で、大学コンソーシアム岡山と倉敷市大学連携推進会議を中心に、ここ1年の活動状況を報告する。なお産学官連携活動は2016年度に発足した産学連携知的財産管理室が担当しており、その活動報告は別に紹介する。さらに、国際医学生連盟を介した海外医学生の受入についても報告する。

キーワード：大学連携事業, 大学コンソーシアム岡山, 倉敷市大学連携推進会議, 国際医学生連盟

Abstract

Kawasaki Medical School is participating in various initiatives for university cooperation and industry-academia-government collaboration. Among these matters, the first author (TO) is responsible for the following: focusing on efforts to form industrial clusters in Okayama prefecture, the Consortium of

Universities in Okayama and the Kurashiki Universities Collaboration Meeting. Since the Industry-Academia Collaboration and Intellectual Property Management Section was established in the 2016 fiscal year, the report regarding this area is omitted from this article. Additionally, we will report on the acceptance of overseas medical students through the International Federation of Medical Students' Associations (IFMSA).

Key words: Universities Cooperation, the Consortium of Universities in Okayama, Kurashiki Universities Collaboration Meeting, International federation of Medical Students' Association

1. はじめに

川崎医科大学では、種々の対外活動を行っており、筆頭著者が2009年度より学長補佐として、2012年度よりは副学長補佐として携わってきた活動については、年次報告およびそれらに対する考察をまとめて報告してきた¹⁻⁸⁾。この間、中央研究部、研究支援係や国際交流委員会などの設置と業務の充実が達成され、特に産学官連携活動については、2016年度より産学連携知的財産管理室が発足した^{9,10)}。筆頭著者はその室長も併任しているが、その活動については、別稿¹¹⁾で紹介し本稿では割愛する。なお、学生レベルでの国際交流であるものの研修について大学の教室が担当することになる国際医学生連盟(International Federation of Medical Students' Associations: IFMSA)¹²⁾を介した学生の受入についても併せて報告する。

表1に本論文の対象となる産学官および大学連携活動を挙げる。学校法人川崎学園として特筆すべきは立地している倉敷市(2015年5月15日)のみならず総社市(2015年7月24日)・備前市(2015年9月15日)と包括協定を結んで来ており、さらに2017年には岡山市(2017年5月30日)とも連携協定を締結したことである¹³⁾。岡山市との提携では、医療や保健、福祉分野の人材育成や災害時の人的支援などが中心となり、特に2016年12月より移転開院した総合医療センターの存在も重要と思われる。なお、これらは

学園全体の地域連携活動であり、本稿は詳細を述べるものではない。

また前述したが表1の3-1)~6)に紹介する産学官連携活動については、その詳細は別稿¹¹⁾にて紹介する。その他、表1に掲載する対外活動について、この1年の進捗を紹介し、考察を加える。

2. 大学連携事業

1) 大学コンソーシアム岡山¹⁴⁾

大学コンソーシアム岡山の事業目標、参加期間等については表2に示す。一昨年設立10周年を迎え、一期2年の代表校は2016年度から就実大学になっている。また2016年度から新見公立大学が正会員として参画し、岡山県内の4年制大学すべてが会員となった。なお特別会員として、短期大学や津山工業高等専門学校なども参加しているが、川崎医療短期大学も含めて4短期大学は入会していない。

既に本報告書の「その7」⁷⁾でも紹介したが、2015年度は10周年記念事業や岡山県と参画大学との包括連携協定など大きな事業もあったが、2016年度以降は新たな10年として運営が行われているものの、基本的には参画大学の会費によって運営されていることから、特段の新規事業を展開することもなく現状維持で事業がなされている。

事業のうち表2の3-2)-①共同教育について

表1 2016～2017年度川崎医科大学の参画する大学/産学官連携活動とその他対外活動の一覧

1. 学校法人川崎学園としての地域連携
1) 倉敷市
2) 総社市
3) 備前市
4) 岡山市 (2017年5月30日に協定締結)
2. 大学連携事業
1) 大学コンソーシアム岡山
2) 倉敷市大学連携推進会議
3. 産学官連携事業 (2017年度より大学組織として産学連携知的財産管理室が所掌)
1) 吉備地域産学官連携知的財産活用ネットワーク
2) 医学系大学産学連携ネットワーク協議会 (medU-net) (センター：東京医科歯科大学)
3) 中国地域産学官連携コンソーシアム (さんさんコンソ)
4) 岡山県
① 岡山県産学官連携推進会議
② 県内産業クラスター形成に向けた取組
i. ミクロものづくり岡山
ii. メディカルテクノおかやま
iii. おかやま生体信号研究会
iv. おかやまバイオアクティブ研究会
v. メディカルネット岡山
vi. 医療機器開発プロモートおかやま
5) 岡山県医用工学研究会
6) おかやまバイオアクティブ研究会
7) 岡山県企業誘致推進協議会
4. その他対外活動 (国際交流委員会所掌事業を除く)
1) 国際医学生連盟による海外留学生受入

は、2015年度でVOD (Video on Demand) 科目が終了、TV会議システムを用いたLIVE配信授業は、4大学 (山陽学園大学、岡山理科大学、岡山商科大学および中国学園大学) のみでオムニバス授業として残存しているに過ぎない。単位互換で学生が科目開設大学に向く授業は継続されていて、本学は対面式科目の提供のみを行っている (大学コンソーシアム岡山開設以来提供をしているものの、受講生はこれまで0である)。3-2)-②の障がい学生支援については、毎年夏に実施される研修会に筆頭著者あるいは年度によって学生課などの担当者が参加してきているが、2017年は日程の都合もあり参加でき

なかった。ただし2016年4月には「障害者差別解消法」の合理的配慮規定等が施行され¹⁵⁾、『国公立の大学等では障害者への差別的取扱いの禁止と合理的配慮の不提供の禁止が法的義務となり、私立の大学等でも障害者への差別的取扱いの禁止は法的義務・合理的配慮の不提供の禁止は努力義務』となっていることから、本学でもある程度の基盤整備は必要かと考えられる。

表2の3-3)は筆頭著者が委員長を務める社会人教育事業部であり、有料の市民講座シリーズである吉備創生カレッジを展開している¹⁶⁾。表3に本学からの本稿の対象年度の提供科目を提示する。いわゆる無料の一般市民公開講座とは

表2 大学コンソーシアム岡山の事業目標, 参加機関ならびに事業部と委員会

1. 事業目標	大学相互の協力と情報交換・地域経済界との交流・地域社会との交流と生涯学習の推進 地域高校との連携・地域創生学の構築・地域発信による国際交流
2. 参加機関	1) 大学 (17大学) 岡山大学・岡山県立大学・新見公立大学・岡山学院大学・岡山商科大学 岡山理科大学・川崎医科大学・川崎医療福祉大学・環太平洋大学 吉備国際大学・倉敷芸術科学大学・くらしき作陽大学・山陽学園大学 就実大学・中国学園大学・ノートルダム清心女子大学・美作大学
	2) 大学以外 岡山県・岡山経済同友会
	3) 特別会員 (短大および高専) 倉敷市立短期大学・山陽学園短期大学・就実短期大学・中国短期大学 津山工業高等専門学校
	4) 賛助会員 (事業に協賛する高等教育機関等および個人) 現在は登録なし
3. 事業	1) 岡山県との包括連携協定事業
	2) 大学教育事業部 委員会 ①共同教育 ②障がい学生支援
	3) 社会人教育事業部 委員会 ①社会人教育
	4) 産学官連携事業部 委員会 ①地域貢献 ②就職支援
	5) 運営委員会 (各大学の実務窓口担当教員の会)
	6) 企画会議 (各委員会の正副委員長と大学以外会員の担当者との会)
	7) 将来構想委員会 (運営委員会からの選択委員により全体像や将来像を検討)
	8) 事務局 (2年任期の代表校学内に持ち回りで設置)

異なり, 受講生は入会金ならびに各科目で2千円以上の受講料を支払った上での受講であるので人数的には少ないものの, 受講は熱心であり, 授業内容もそれに見合うものを求めることが大学コンソーシアム岡山のスタンスである。本学提供科目の企画や人選については担当窓口である筆頭著者が行って教員に依頼している。また大学コンソーシアム岡山の当該委員長としても, 受講生数獲得を目標にするのではなく, 大学の有する (本学の場合には医科学の有する) 多様な学問領域の紹介も兼ねていることを充分

に認識した上での展開を目指しており, 実際に2016年度前期では約1/4~1/5の受講生は新規入会の方々でもあった。

なお, 2017年度前期には, 受講生があまりにも少ないためにキャンセルされた科目が生じた。実際は岡山大学の臨床医学系の担当講師であったため, 通常の大学で教育と研究に従事する他の大学の講師とは少し事情が異なる。ただ, 本学の臨床の先生方には, それでも担当してくださっていることを改めて感謝する。

表2の3-4)-①の地域貢献については, 5年

表3 2016年度後期, 2017年度前期および後期の吉備創生カレッジへの川崎医科大学提供科目

科目名	講義年月日(含:予定)	担当教員	所属	内容
2016年度後期				
環境と健康：最近の話題	2016年11月10日 11月24日 12月8日	大槻 剛巳 〃 〃	衛生学 〃 〃	感染症や食中毒 アスベスト研究の社会還元 健康増進住宅の構築
2017年度前期				
岡山・新たな医療の始まり	2017年5月20日 6月3日 5月9日	鎌田 智有 瀧川奈義夫 猶本 良夫	健康管理学 総合内科学4 総合医療センター 院長/総合外科学	市街地からの疾病予防と健康管理 新医療：肺がんに立ち向かう ここが魅力：川崎医科大学総合医療センター
2017年度後期（予定）				
整形外科における最新医療	2018年1月15日 1月22日 1月29日	長谷川健二郎 大成 和寛 射場 英明	手外科・再建整形外科学 脊椎・災害整形外科学 脊椎・災害整形外科学	マイクロサージャリー 骨粗鬆症における診断と治療 腰痛症における予防・診断・治療

以上継続している「日ようび子ども大学」と「エコナイト」が中心になっている。加えて、2015年度まで、岡山経済同友会主導のボランティア活動は、以前には4年間東日本大震災被災地の岩手県大槌町への学生派遣があり、2016年度には熊本地震被災地の益城町へボランティア学生24人の緊急派遣（授業再開に向け小学校の教室・体育館清掃、運動場の整備など）が実施された。2017年度は本稿執筆段階では本活動は展開されていない状況にある。なお、本学学生の場合はカリキュラムなどの面から参加は適わない状況であるが、いずれも認定特定非営利活動法人アムダ（AMDA, Association of Medical Doctors of Asia）¹⁷⁾との協力関係に根差しており、医療としても災害医療特殊部隊（Disaster Medical Assistance Team: DMAT）や災害派遣精神医療チーム（Disaster Psychiatric Assistance Team: DPAT）などの活動にもつながる面がある。また、川崎学園はAMDAとも医療連携協定を結んでおり¹⁸⁾、こういった報に触れる度に、何かボランティア活動などを評価する仕組

みを工夫できればと考える。

「日ようび子ども大学」については2017年度は参画しなかった。例年「ぬいぐるみ病院」の部活動として出展してもらっていたが、活動の展開の場は他にもあることで学生諸子にも了解してもらって非参加とした。開催以来、来場者が漸増し、2016年度は2,500名を超えた。ただし、2016年度は雨天の中の開催であり、会場である岡山県生涯学習センターでは駐車場を併設されている烏城高校のグラウンドを利用していたが、終了後に周辺住宅地の道路への泥の集積や、グラウンドの修復が大変な作業であったことなど、新たな課題が浮かび上がることになった。1年間の協議で中止などの意見も委員会では出されたものの、実際には広報を縮小して来場者を減ずる方向で対応がなされた。また有料で岡山駅西口からシャトルバスを運行したものの、やはり子ども連れの家族は自家用車での来場が多く、シャトルバスの利用は非常に少なかった。幸い2017年度は好天に恵まれ、来場者も1,500人前後となって対応が奏功した面と、天候に

よって課題が具現化することがなく、見かけ上順調な運営であった面が見受けられた。しかし、イベントのプロモーションをする立場として考えるといくら無料のイベントとしても、課題の解決法も考慮せず実施に入る姿勢に対して疑問があり、その解決の方策がないのであれば、少なくとも本学としてその状況の中で参画することを良しとせずとの判断から、非参加とした。参画大学では「沢山の子どもたちが来場して楽しくしているから良い」、「学生たちも楽しそうにしているから実施したい」という意見は出ているが、これらは参画各大学としての事情であり、大学コンソーシアム岡山本体が、このイベントの事業主としての責任をどうするかということとは別の視点と思われた。また筆頭著者は、地域貢献委員会委員として現場に参加したものの、総合受付には大学コンソーシアム岡山の事務方が一人控えているだけで、その方も種々の事情で各大学の催しの場に向かわねばならないこともあり、客観的に包括的な責任などについて共催しているとはいえ、岡山県生涯学習センターの方々に依存していることが強いと感じざるを得なかった。こういった問題が十分に解決できないとすると、今後も参画は難しいかも知れない。

「エコナイト」は、七夕前後にそれぞれの大学でエコロジーを考えるイベントを展開するとともに、共通イベントを実施してきた。川崎医療福祉大学は例年自学での開催を行い、2017年度も「七夕寄席」と「大学看板等のライトダウン」を実施したが¹⁹⁾、共通イベントには参加しない状況である。川崎医科大学の場合、多くの学年で1学期の期末試験前であり、また実習中であること、加えて附属病院の併設もあってライトダウンも能わず、担当の筆頭著者が共通イベントで趣味の音楽を披露することで一応の参加としてきた。ただし、2017年度は上記のごとく「日ようび子ども大学」にも参画しなかった

こともあって、「エコナイト」共通イベントにも非参加とした。「エコナイト」は2016年度から奉還町商店街の土曜夜市との共同開催となり、イベントとしての参加者も増多して活発な活動になったが、当初の「エコ」に重きを置いたイベントというより、夜市の催し物的な印象が強くなってきており、これもまた本学の今後の参加は難しいかも知れない。

大学コンソーシアム岡山の設立時は、地域における大学連携支援事業あるいは教育の連携について国からの補助金が助成されていた時期であった。しかし、ここ数年は「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」²⁰⁾などの事業に表されるように、文部科学省による補助金の動向も変化してきており、これは政府の大きな方針の一つとして地方創生が挙げられていることによると思われる。そのような流れから、今後も国としての方針、国が大学に求める事業体系については、刻々と変化する可能性も秘めている。そういった流れの中で10年以上を経過した大学コンソーシアム岡山が助成金などを受けずに、大学の会費収入のみで展開する事業には限界がある。本学とは関連が薄いですが、就職支援委員会や障がい学生支援委員会などが展開する合同企業説明会や研修会は、他県の大学コンソーシアムにない稀有な事業となっており、県内全体を鑑みるとそれでも連携組織を有していることの意義は在すると考えられる。

なお、岡山県との包括協定のもとに、岡山県のホームページの中に「岡山県大学ガイド2018」がPDFで掲載され²¹⁾、本学も紹介されている。また、各大学ウェブへのリンクも貼られている。しかし、県のトップサイトから「組織で探す」>「県民生活課」>「県民生活交通課」に入ると、「関連情報」にアップされているに過ぎず、「岡山県大学ガイド」というタームで検索しないと到底辿り着けないような状況あるのは、やや寂しいところである。

なお、現在大学コンソーシアム岡山では法人化の問題、あるいは医学部等では無縁であるが、例えば会員である岡山県経済同友会の構成メンバー（企業の役職者）との包括協定に基づいた招聘講師の選択などのプラットフォーム構築の是非などの課題が表出しており、将来構想委員会で検討を進めている。法人化については前向きな意見が多いが、講師招聘については、これまで同様の展開を既に実施してきた大学では、相当の努力で実現していることであり、新規に展開を希望する大学であっても安易な途に走らずに各大学で講師の招聘のための努力を惜しむべきではないとの意見や、経済同友会側でも講師として活動可能な人材も有限であり、十分な対応はできそうにないなどの問題点が挙がっている。

2) 倉敷市大学連携推進会議

表1, 2-2)の倉敷市大学連携推進会議²²⁾も既

に6年目に入った。主たる活動はライフパーク倉敷での各大学からの無料市民公開講座であるが、その他、本学とは直接関係がないもののインターンシップ事業（主として倉敷市役所での体験など）や、倉敷市保健所からの自殺に対するゲートキーパー養成の情報開示などの展開が行われている。

本学も設立当初から講座を提供している。こちらは大学コンソーシアム岡山の吉備創生カレッジと異なり無料であることもあって、受講生数は十分に多い（30～60名前後）。表4に2016年度と2017年度の予定を含む提供講座を紹介している。2015年度からは直接運営に関与する倉敷市企画経営室の要請もあり、ライフパーク倉敷への来場が難しい市民に向けて、市内の公民館や図書館などを会場にする開講を実施した。2015年度には真備図書館からの要望によって、当館で実施し好評に終了できた。2016年度はライフパーク倉敷でのシリーズ講座とともに

表4 2016年度から2017年度にかけての倉敷市大学連携講座への川崎医科大学提供科目

科目名	講義年月日(含:予定)	担当教員	所属	内容
2016年度				
がんと闘う 外科医たち	2016年9月21日	吉田 和弘	総合外科学	消化器がん～たゆまぬ努力～
	10月18日	野村 長久	乳腺甲状腺外科学	「乳がん」～健診・手術,そして薬物療法
	11月30日	宮地 禎幸	泌尿器科学	「腎細胞がん」について,泌尿器科領域の「がん」
	12月04日	中田 昌男	呼吸器外科学	肺がんに挑む-呼吸器外科のこれまでとこれから-
環境と健康※	2016年12月22日	大槻 剛巳	衛生学	食中毒や感染症～ジカ熱やデング熱も含めて～
	2017年1月19日	〃	〃	アスベストなどの繊維状物質の健康影響と,その対策
	2月16日	〃	〃	住環境からの健康影響から健康増進住環境へ
2017年度				
生活習慣病 を含めた高 齢者の健康 について	2017年9月29日	高尾 俊弘 山本 直子	健康管理学 附属病院健康管理 センター(保健師)	(1)血圧が気になる方へ ～知っておきたい予防と改善～
	10月26日	下田 将司	糖尿病・代謝・内分泌内科学	(2)意外と知らないお酒とタバコの話 防ごう糖尿病!保とう若さ!
	11月28日	佐藤 稔	腎臓・高血圧内科学	慢性腎臓病と高血圧の深い関係
	12月22日	久徳 弓子	神経内科学	知ろう!防ごう!認知症

※：倉敷市との企画で出前授業形式で、船穂・玉島・児島の公民館で実施

に、筆頭著者が出前講座を実施することとしたが、出先公民館からの希望ではなかったこと、加えて各地の公民館には多くのイベント案内が掲載されていてそれらの中で埋没してしまった可能性があること、そして試みとしての実施であったため筆頭著者が科目提供したものの講義内容が一般市民の興味を惹かなかった可能性もあり、ライフパークで展開する講座に比して1/3~1/4の受講生となってしまった。その反省を受けて、2017年度はライフパークでの展開のみとし、改めて一般市民の興味が高いであろう生活習慣病を講座のテーマとすることにした。なお、倉敷企画経営室では受講生増に向け、講師が提示した講義タイトルなども相談の上で、より興味を惹かれるように対応するなどの努力をし、2017年度からは各講師に予め面談を申し込み、顔を知ること、そして内容について協議するなどの労力を費やしている。その姿勢は評価できるものであり、今後とも有効な協力関係を保ちたい。ただし、吉備創生カレッジでも同様であるが、リピーターである受講生の占める割合がニューカマーに比べて格段に多い現実もあり、こういった点については解決に対する妙案がないのが現実である。さらに、科目提供側の大学でも適切な人材には限りがあり、動もすれば講座内容が過去の提供科目と重複するケースも出てきており(本学でも然りである)、継続性と発展性の両者を満たすことの難しさが、少しずつ表出してきた印象もある。

なお、2015年度までの3年間「地域に飛び出す学生支援事業」が展開され、本学では初年度に「ぬいぐるみ病院」、2年目は「合唱部フェッセル」、3年目には「Jazz研究会」と「折り紙同好会」が助成を受けることができた。本支援事業は2015年度で終了したが、自治体の展開する類似の事業情報などを収集しながら学生の活動を支援していきたい。しかし、カリキュラムとの関係で、本学の学生が十分に対峙できない事

業等も多く、なかなか難しい印象も受けている。

3. その他の対外活動(国際交流委員会所掌事業を除く)

1) 国際医学生連盟による海外留学生受入

本稿では毎回、その他の対外活動の中でIFMSA¹²⁾を介した学生国際交流について触れている¹⁻⁸⁾。ただし、2015年度よりは国際交流委員会が設置され、多くの国際交流事業が展開されており、また学園としての英国・オクスフォード大学のグリーンテンプルトンカレッジとの交流事業も継続されている。

IFMSAを介した国際医学生交流は、本学では2009年から始まった(表5)。2017年度には本学から出向いた学生はいなかったが、スペインから2名の女子学生が来学した。IFMSAの制度として医学研究での留学ということで、当初の窓口として本学では衛生学が受入研修教室として担当した(当初は筆頭著者がESSの顧問をしていたためである)。また、ここ2~3年は学生間交流としての短期留学を優先させ、教室としては昼間の研究の研修見学を例年、筆者の李を中心に担当し、週末や放課後の時間帯は可能な限り学生間での交流に費やしてもらう体制としている。2017年度もESSの学生が中心となって、種々の交流を試みた。ただし、最近には既に本国で臨床実習なども終了した学生も多く、医学研究のみならず臨床の現場の見学を望む者も多い。

本来、学生間交流制度ではあるが、研究あるいは臨床にしても大学の教員が昼間に対応せざるを得ない。大学として本制度を利用して学生が短期留学に出向く、あるいは来日した医学生との間で連携を深めるということに意義があると考えるのであれば、来日医学生の昼間の臨床あるいは基礎研究などの見学実習については、大学として向き合う、すなわち、国際交流委員会などが中心となって、来日学生の事前の希望

表5 国際医学生連盟（IFMSA）を介した本学学生の短期留学と海外学生の受入

川崎医科大学学生の留学			
年度	氏名	留学先大学	国名
2009	井川 京子 (M3)	エラスムス大学	オランダ王国
2012	奥井 侑里 (M4)	イエナ大学	ドイツ連邦共和国
2013	小暮 祐太 (M3)	マドリッド・コンプルテンセ大学	スペイン王国
	古澤 航平 (M2)	ペルアナ・カジェタノ・エレディア大学	ペルー共和国
2014	香川 元伸 (M3)	ジェラルド・バヤル大学	トルコ共和国
2016	平光 俊貴 (M3)	ルーヴェン・カトリック大学	ベルギー王国
川崎医科大学での受入			
年度	氏名	所属大学	国名
2009	Mr. Johannes Sets	ウィーン大学	オーストリア共和国
2011	Mr. Maximillian Makus Kremer	インスブルック大学	オーストリア共和国
	Ms. Micaela Lilianca Rea Tobler	ベルン大学	スイス連邦
	Mr. Michal Fiser	チャールズ大学	チェコ共和国
2013	Ms. Jitka Šlehoferová	プラハカレル大学	チェコ共和国
2014	Mr. Dani Zalem	イエテボリ大学	スウェーデン王国
2015	Ms. Linda Al-Hassany	エラスムス大学	オランダ王国
	Ms. Valentina Marinović	ザグレブ大学	クロアチア共和国
2016	Ms. Laura Leinonen	トゥルク大学	フィンランド共和国
	Ms. Aliya Sayfullina	バシキール州立医科大学	ロシア連邦
2017	Ms. Maria Sanz Codina	ロビラ・イ・ビルジリ大学	スペイン王国
	Ms. Paula de Valle Gomez	マドリッド・コンプルテンセ大学	スペイン王国

に可能な限り合致するように、臨床・基礎を含めた各教室との連携についての手続き窓口業務を行うということも一つの方策かも知れない。

おわりに

筆頭著者が主に関わっている川崎医科大学での対外活動について、この1年間の状況を報告した。産学官連携については産学連携知的財産管理室の発足により本稿からは省いた。また大学コンソーシアム岡山での二つのイベントに参加しなかったこともあって、倉敷市大学連携推進会議も含めて大きな課題に対峙すべき場面もなく、目立った変化は見られなかった。

川崎医科大学の対外活動には、産学官連携に

ついては、知財管理などの面も加わることで、本来なら教員および事務方にも専任者が居ることは望ましいことと思える。その面を除くと大学連携事業は、現状でも十分対応は可能と思われる。

ただし、大学連携などに関して国の方針が現状のような地方創生への即戦力を大学で育成せよといった目標に終始するとなると、医科単科である本学は県内大学連携として十分に関与することは難しいと思われる。それだけでなく、卒前卒後の良医育成の中でも、国際認証や改訂版医学教育モデルコアカリキュラム²³⁾における課題、それにまつわる医学教育における outcome-based education (OBE) の充実、大学

組織としてのPDCAサイクルの展開の充実なども必要である上に、診療と研究では倫理や利益相反の問題にも落ち度なく対応しなければならない。また卒業教育では専門医制度の新たな展開が、臨床系では2018年度から始まり²⁴⁾、社会医学系専門医制度は、2017年度春から既に走り出している(本学のプログラムも認定されている)²⁵⁾。こういった状況で、医科単科の大学が地域貢献も含めた地方創生の役割を担うのは、やはり医学医療への貢献であろう。2017年の夏には、厚生労働省が「地域枠」入学制度について地元出身者に限定する仕組みを固めた報道もあり²⁶⁾、本学ではこういった方針に対する対策にも向かい合うことも必要になってくるが、現在の地域枠推薦入試が概ねそういった形式を取っているのであろうか。しかし、医科の教育で、こういった課題が山積する中で、学生にとっても厳しいカリキュラムは、県内の大学連携に対して、現状以上に深くコミットするのは、かなり困難な部分もあろうかとも感じられる。とはいえ、川崎学園としても地域との包括協定などを締結しているので、岡山県、そして倉敷市に根ざした高等教育機関として責務が生じるなら、そこから目を背けることなく対応もしなければならないとも思える。更に願わくば、教員あるいは事務方も含めた人材の拡充も適えば一層の充実が図れるとも思われることを記載して、稿を終える。

謝 辞

本稿で紹介した多くの活動については、学内の多数の教職員の方々のご理解とご協力によって実施し得た事業が多くありました。誌上ではありますが、謹んで感謝の意を表します。誠にありがとうございました。

参考文献

(URLについて、すべて2017年7月27日にアクセス可能であった。)

- 1) 大槻剛巳, 毛利聡, 虫明基, 富田正文, 西村泰光, 松島眞治, 勝山博信, 川西礼美, 福永仁夫. 川崎医科大学における大学連携, 産学官連携等, 対外活動について: その1. 川崎医学会誌一般教養篇. 37:31-46, 2011
- 2) 大槻剛巳, 小笠原康夫, 柏原直樹, 佐藤稔, 大澤裕, 矢田豊隆, 毛利聡, 山内明, 武井直子, 前田恵, 西村泰光, 小野寺昇, 望月精一, 茅野功, 川西礼美, 福永仁夫. 川崎医科大学における大学連携, 産学官連携等, 対外活動について: その2. 川崎医学会誌一般教養篇. 37:47-59, 2011
- 3) 大槻剛巳, 日野啓輔, 種本和雄, 藤田喜久, 中塚秀輝, 長谷川徹, 中野貴司, 田中孝明, 芝田敬, 松崎秀紀, 李順姫, 武井直子, 西村泰光, 清蔭恵美, 樋田一徳, 佐々木和信, 川西礼美, 福永仁夫. 川崎医科大学における大学連携, 産学官連携等, 対外活動について: その3. 川崎医学会誌一般教養篇. 37:61-75, 2011
- 4) 大槻剛巳, 虫明基, 富田正文, 寺田喜平, 福永仁夫. 川崎医科大学における大学連携, 産学官連携等, 対外活動について: その4 - 2011年度半ばから2012年度半ばにかけての活動 -. 川崎医学会誌一般教養篇 2012:38, 1-15
- 5) 大槻剛巳, 寺田喜平, 山内明, 福永仁夫. 川崎医科大学における大学連携, 産学官連携, 対外活動について: その5 - 2012年度半ばから2013年度半ばにかけての活動 -. 川崎医学会誌一般教養篇 39:1-14, 2013
- 6) 大槻剛巳, 寺田喜平, 山内明, 福永仁夫. 川崎医科大学における大学連携, 産学官連携等, 対外活動について: その6 - 2013年度半ばから2014年度半ばにかけての活動 -. 川崎医学会誌一般教養篇 40:1-20, 2014
- 7) 大槻剛巳, 寺田喜平, 山内明, 福永仁夫. 川崎

- 医科大学における大学連携，産学官連携等，対外活動について：その7－2014年度半ばから2015年度半ばにかけての活動－．川崎医学会雑誌一般教養編 41:1-21, 2015
- 8) 大槻剛巳，山内 明，寺田喜平，李 順姫，西村泰光，福永仁夫．川崎医科大学における大学連携，産学官連携，対外活動について：その8－2015年度半ばから2016年度半ばにかけての活動－．川崎医学会誌－一般教養篇－ 42:1-18, 2016
- 9) 大槻剛巳．ようこそ，産知室へ．川崎医科大学研究ニュース 88:18-21, 2017
- 10) <http://www.kawasaki-m.ac.jp/med/sanchi/>
- 11) 大槻剛巳，山内明，西村泰光，西山和成，本地直貴，青江智子，多田美津恵，川西礼美．産学連携知的財産管理室－2016年度活動報告－．川崎医学会誌－一般教養篇－ 43:13-28, 2017
- 12) <https://ifmsa.org/>
- 13) <http://www.kawasaki-m.ac.jp/gakuen/subpage/masscom/20170602.php>
- 14) <http://www.consortium-okayama.jp/>
- 15) http://www8.cao.go.jp/shougai/suishin/law_h25-65.html
- 16) <http://www.consortium-okayama.jp/kibi-sousei.html>
- 17) <http://amda.or.jp/>
- 18) <http://medica.sanyonews.jp/article/6104/>
- 19) <https://w.kawasaki-m.ac.jp/data/3924/topicsDtl/>
- 20) http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/coc/
- 21) <http://www.pref.okayama.jp/page/503268.html>
- 22) <http://www.city.kurashiki.okayama.jp/5756.htm>
- 23) http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/033-2/toushin/1383962.htm
- 24) <http://www.japan-senmon-i.jp/>
- 25) <http://shakai-senmon-i.umin.jp/>
- 26) <https://mainichi.jp/articles/20170724/ddm/003/040/105000c>

